



Title	VI.「異文化」を伝えるとはどのようなことか
Author(s)	中村, 重穂
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 69-81
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59650
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_08.pdf



Ⅵ. 「異文化」を伝えるとはどのようなことか

中 村 重 穂

1. 背景

本授業の背景をなす理念は、日本人の、特に自文化に対する意識的あるいは無意識的なステレオタイプ⁽¹⁾とそのようなステレオタイプの創出に繋がる(一部の)日本文化研究を理論的なレベルで批判的に突き崩すと同時に、これらに替わる自文化を発見し、それ(ら)を他者に「伝える」という実践的・能動的レベルの活動に結びつけるということであった。

本稿は実践報告であるので、上記の理念を支える理論的研究についての詳述は控えるが、文化社会学的な基盤研究として杉本(1996)、濱口(1996)、ベフ(1997)を挙げておく。また、本授業が日本人学生にあっては特に新渡戸カレッジ生を対象としていることも、その人材像に照らした場合、上記のような理念がまず必要とされる場所であった。

2. 目的・目標

当初設定した授業目的は以下の通りである。

- 1) 主に「日本(文化)論」を切り口にして、従来の文化研究を批判的に検討する。
- 2) 「文化」のとらえ方・語り方を考える。
- 3) 「文化」を伝えるという営みを、主としてミクロなレベルで考え、モデル構築を行う。

また、到達目標としては以下の3点を掲げた。

- 1) 「自文化・異文化」に対する思いこみから脱却する。
 - 2) 多様な文化と自分との距離感をうまく保てるようになる。
 - 3) ある「文化」を異なる文化圏の人に伝えられるようになる。
- いずれも1で述べた理念を反映するものとして設計されたが、これらは、後述するように授業の進行に伴って大きな動揺を来すことになった。

3. 開講学期、及び受講者

本授業は2013年度第2学期に開講され、開講形態としては新渡戸カレッジ生を中心とする日本人学生向け「一般教育演習(フレッシュマンセミ

ナー)」と日本語・日本文化研修生(以下日研生)の専門科目との相互乗り入れ型の科目であった。

受講者は、日本人学生 8 名(うち新渡戸カレッジ生 7 名)、日研生 14 名(中国 3 名、カザフスタン 3 名、ロシア 2 名、ヴェトナム 2 名、台湾・アメリカ・スイス・オーストラリア各 1 名)であった。

4. 授業スケジュール

授業は、日本人学生と日研生で 1 週間ずれがあるが、共に全 15 回行われた(公務出張で 1 回休講があったため週数としては 16 週開講)。当初計画では、担当者の講義と受講生のディスカッションで構成される展開を考えていたが、抽象的・理論的な内容を与えすぎることによる議論の瑣末化と教員の介入を極力避けることを目的とし、日研生の日本語運用力の伸長も勘案して、講義は 2 回にとどめ、グループ・ディスカッションと課題発表を軸とした計画に変更した。以下がスケジュールである。

第 1 回：ガイダンス 1 (日本人学生向け)

第 2 回：ガイダンス 2 (日研生向け)、文化研究方法論入門講義・1

第 3 回：文化研究方法論入門講義・2

第 4 回～第 10 回：グループ・ディスカッション (7 回)

第 11 回～第 14 回：文化伝達活動モデルの発表 (4 回)

第 15 回：ワールドカフェ方式によるまとめ (主に日本人学生向け)

第 16 回：まとめ (日研生向け)

5. 内容

5.1 授業に於ける発表課題とその準備講義

受講生に対しては、開講時のガイダンスで第 11～14 回に於ける発表課題として、「自分の文化を『異』文化の人に伝えるためにどのようなやり方で伝えるか」のモデルを案出し発表することを指示した。発表時間は一人あたり 15 分以内とし、発表方法・形態については受講生の自由としたが、「教室内でできるものであること」を条件とした。

この課題の実行に向けて 7 回のディスカッションを行ったが、“無からの創造”ができる訳ではないので、方向付けを与えるために担当者が 2 回の準備講義を行った。第 1 回講義では、異文化間コミュニケーション研究や比較文化論という学問領域が形成された歴史を紹介し、文化社会学の枠

組みを説明した。第2回講義では、この授業の性格を明確化し；

- 1) 「国」にとらわれた「文化」の見方を考えなおす場
- 2) 「文化」の見方を学ぶ場
- 3) 学んだ文化の見方を実践する場

と規定した。その上で、上記「2)「文化」の見方を学ぶ場」の具体的・代表的な視点を8点紹介し、それぞれの具体例を挙げて、次回からのディスカッションに方向付けが与えられるようにした。

5.2 授業の進行状況

授業の前半2/3は、4で述べたように、前節に示した発表課題を考究するためのディスカッションに費やされた。このディスカッションに先だって、授業の全体的な進め方について担当者は受講生に「受講にあたっての心構え」として以下の諸点を注意しておいた。

- ・この授業では、教員は基本的にほとんど何も教えない。授業の目標・最終課題を遂行するために何を考えればよいのか、どのような活動をすればよいのか、などはほぼ全て出席者がグループでディスカッションを行い、情報を共有し合って決めていく。
- ・教師の役割は、出席者の活動を側面から支援するファシリテーターであるが、出席者が提出することになるプロトコル・ノート(←後述)の内容に対しては、ほぼ毎回「○○ではない／○○は違う」と“だめ出し”をする。それを承けて自分たちの考えを練り直し、『異文化』を伝えるとはどのようなことか」に対する解答と活動モデルを作り上げることが求められる。
- ・この過程で、出席者は嫌でも他者と関わっていかなければならないし、自分の意見を表明しなければならない。他者と関わることを好まず、自分一人で思索する方が合っていると思う者は受講を避ける方が賢明である。

以上の「心構え」を承けて受講者が確定した後に、前述の準備講義を経て受講生はグループに分かれ、ディスカッションに臨んだ。ディスカッションは、メンバーが固定した4～5名のグループを五つ組織させ、それぞれに名前を付けさせた。どのグループも日本人学生と日研生から成り、グループの分け方、ディスカッションの進め方は全て受講生に委ねた。担当教員は、授業内では一時折簡単な助言を差し挟むほかは全く介入しな

い。第4回～第10回の授業は、毎回60分ディスカッションを行い、その後、各グループの担当者が3分でその日の討議内容を報告し、クラス全体で共有・参照(=15分)した上で、残りの15分でまとめ、あるいは次のディスカッションのテーマや方向付け、方法などを考えるという流れで進められた。その最終目的は、7回のディスカッション終了段階で発表課題である『異文化』を伝える」ための活動のアイディア／イメージ／プランができていることとし、グループのメンバーが全員同じ内容や方法で発表をする必要は全くないことも併せて注意した。

5.3 担当教員の関わり方についてープロトコル・ノートの使用ー

前節で、担当教員はほぼ全く介入しないことを述べた。ただ、これは授業時間内での話であって、授業時間外では一定の介入を行った。本節ではその際に用いたプロトコル・ノートについて説明する。

プロトコルそのもの及びその使い方については、桑木(1981)、大橋(2007)が説明しているので、詳細についてはこれらを参照されたい。筆者のプロトコル・ノートは、既に述べたように、担当者の授業外介入に相当するものであり、受講生が毎週木曜日の授業後、翌週月曜日に提出したものに対して担当者が水曜日までにコメントを記入して受講生に返却し、受講生はそれを読んで次のディスカッションに臨む、というサイクルで使用された。その作成方法や意図、期待される効果については、受講生に配布した稿末の【資料】を参照されたい。

ここでは極簡単に述べるにとどめるが、ノートの左1ページに各回のディスカッションのまとめと、担当者への質問を記入し、右1ページに担当者からの応答やコメントを記入する。これは、受講生の気づき・成長・変化(あるいは無変化)の記録であると共に発表やレポートの資料にもなる。担当者は、コメントで受講生の記述について褒めることは極まれにしかなく通常は受講生の記述に対する疑問や、別の視点からの検討の促しや、だめ出しなどを提示して、既存の知識や視点に対して揺さぶりをかけたり、再考を促したりした。7回のディスカッション終了後に担当者は、総括コメントを受講生一人一人に個別に記入してから返却し、口頭発表やレポートに活用できるよう指導的助言を行った。

5.4 口頭発表について

第11回～14回までを口頭発表として、既述のように受講生一人あたり15分で先に挙げた課題について発表を行った。やり方について特に指示したわけではないが、全員がパワーポイントを用いて発表を行った。うち1件は、パワーポイントによるスライド投影と落語のパフォーマンスを組み合わせるといふ出色のものであり、もう1件は、別の学生の協力を得てスライド投影の合間に実例を寸劇で提示するという工夫を凝らしたものであった。

各受講者の発表の表題・内容を列記することは避けるが、大別すると、

- 1) 異文化(現象)・異文化間コミュニケーションの理論的研究
- 2) 異文化理解の理論と実体験との融合に基づく考察の提示
- 3) 受講生自身の異文化体験とその理解過程を通じた発見の報告
- 4) 異文化(理解)・異文化間コミュニケーションの理論の異文化的実践
- 5) 自文化の事象の単なる紹介(=所謂 “cultural show”)

に分けられる。最も多かったものは1)(6件)で、次いで2)と5)(各5件)であった。すべての発表が終了した後で、翌週にワールドカフェ方式で意見交換を行い、他のグループのメンバーと発表についての質疑応答やコメント交換の機会を提供した。

6. 評価方法

評価は、プロトコル・ノート、口頭発表、最終レポートによって行い、日研生については日本語の水準を考慮に入れて日本人学生とは若干異なる比率で上記三つの評価を配分した。それぞれの評価基準は以下の通りである。

- ・日本人学生：プロトコル・ノート(40%) + 口頭発表(30%) + 最終レポート(30%) = 100%
- ・日研生：プロトコル・ノート(20%) + 口頭発表(40%) + 最終レポート(40%) = 100%

最終レポートの課題は、「他の受講生の発表から一つを選んで、それについて内容を簡単に(400字程度で)まとめて、良い点を評価し、また、建設的な批判のコメントあるいは改善のためのアドバイスを加えよ」とし、2,000字前後での作成を指示した。これは；

- 1) 自分の発表が終わっただけで安心・満足してしまい、以後の授業への

取り組みが消極的になるのを避ける

- 2) 自分の発表を他の受講生の発表と突き合わせることによって、自分の発表に対する振り返りの機会を得る。
- 3) 他の受講生の発表から刺激を受けて新たな学び・課題を発見する
- 4) 日本語の学習として要約力をつけるようにする

の4点を意図して課したものである。

上記三つのそれぞれの評価の観点と評語は以下の通りとした。

a) プロトコル・ノート

- ・ディスカッションの内容を的確にまとめてあるか …C
- ・ディスカッションについて自分なりのコメントができているか …B
- ・新たな気づきや視点・考え方の変容があるか …A
- ・教員を知的に刺激して触発させるものがあったか …E

※ディスカッションの内容が伝わらない場合は「D」

b) 口頭発表

- ・異文化という現象・事物を伝えていたか …C
- ・事実の紹介だけでなく伝える視点が明確だったか …B
- ・現象・事物に対して新たな／多面的な観点から考察・紹介していたか …A
- ・異文化を伝えるという活動自体を一つの文化として提示していたか、または、教員を知的に刺激して触発させるものがあったか …E

※現象・事物の紹介自体が理解困難な場合は「D」

c) 最終レポート

- ・他の学生の発表を的確にまとめているか …C
- ・建設的批判あるいは改善アドバイスがあるか …B
- ・批判あるいはアドバイスの視点が明確であるか …A
- ・執筆者自身の成長が窺えるものであるか …E

※他の学生の発表をまとめ切れていないものは「D」

これらのE～Cは、全学教育科目の評語「秀」～「可」に概ね相当するものであり、Dが「不可」に対応する。

以上が評価の方法である。

7. 受講生の反応

授業時に実見した受講生の反応については、次章で触れたいと思うので、

本章では、最終回の授業(=日研究生のためのまとめのクラス)で出た振り返りの意見と、授業評価アンケートの結果を取り上げる。

日研究生には最終回の授業で、「この授業だからできたこと」について振り返りを述べてもらったが、当日出席した12名中4名から日本語のレベルのせいで言いたいことが充分言えなかったという趣旨の発言があり、また、授業評価アンケート(日本人学生・日研究生の双方)でもこういった点について何らかのネガティブなコメントを述べた者が7名いた。9月末に渡日して10月から日本語だけでディスカッションを毎回続ける授業を受けるというのは確かに日研究生にとっては大変であったと思量されるが、クラスの1/3が日本語のレベルの問題を感じていたということは今後の授業形態に影響を与えるものである。

勿論、肯定的な反応がなかったわけではなく、日本語に対してチャレンジできた、日本人の考え方を知ることができた、という意見や、(日本人－非日本人という二項対立を超えて)母語の異なる学生とのグループでのディスカッションが良かった、日本人と学ぶクラスでも日研究生だけで学ぶクラスでもみんな人間だから同じである、お互いのステレオタイプや思いこみをディスカッションを通して考えることができ解釈の相違がむしろ役立った、といった意見も聞かれた。

これに対して、日研究生だけだったらむしろもっと自由に話せたかもしれない=日本人学生があまり話さなかった、というクラス/グループ構成に批判的な意見も見られたことを付言しておく。

授業評価アンケートから見ると、全15項目の設問(5点法)に於いて、多文化交流科目全体で高得点(上位3項目)であったのは；

- ・ 設問14「言語や文化、価値観の多様性について考えることができた」：4.8/5点
- ・ 設問11「他者の意見をよく聞き、異なる文化、価値観、態度等を尊重することができた」：4.7/5点
- ・ 設問13「他者との活動を通して、自分の文化について客観的に考えることができた」：4.6/5点

であり、低得点(下位3項目)であったのは；

- ・ 設問1「お互いを有効な情報資源として活用し、他者との活動のための協力的な関係を作ることができた」：3.6/5点
- ・ 設問2「他者との活動で自分の役割を見つけ、積極的に行動することが

できた」：3.7/5点

- ・設問8「相手が誰であっても反対意見をしっかりと述べる事ができた」：3.8/5点

であったが、これらに対して、筆者の科目の上位3項目は、第1位が設問14(4.65/5点)、第2位が設問1(4.55/5点)、第3位が設問11(4.45/5点)であり、下位3項目は；

- ・設問10「相手に自分の意見が正しく伝わっていないとき、分かるまで丁寧に説明することができた」：3.75/5点
- ・設問6「自分の意見を伝えるとき、聞いている人にわかりやすいように伝えることができた」：3.85/5点
- ・設問12「他者との活動を通して、自分の母語について客観的に考えることができた」：3.9/5点

であった。

これらから、全体では低評価である設問1が筆者の授業では高評価であること(及び設問11の高評価も)を通して、7回にわたるグループ・ディスカッションが受講生の間に良い形のダイナミクスをもたらし、これを受講生が肯定的に受け止めていたことが窺える。他方、低評価の設問のうち二つが「自分の意見を伝える」行為に関わるものであることから、自己表現や発信型の行動については、－上述の日本語のレベルの問題とも相俟って－受講生が充分な達成感を得られなかったことが窺える。とすれば、グループ・ディスカッションに一定の肯定感が示されたことと自己表現や発信型の行動への不満足との懸隔は、言語に頼らないコミュニケーション行動によって補完され、そこで(かろうじて?)成立していたと考えることが可能である。

以上が受講生の反応の概略である。

8. 達成できた点、及び問題点

8.1 達成できた点について

今回の授業について端的に言えば、達成できた点はあまりにも少なかった。5-1で述べたように授業の一つの目的が「『国』にとらわれた『文化』の見方を考えなおす場」であったにも拘わらず、口頭発表が5-4に示したように、「異文化(現象)・異文化間コミュニケーションの理論的研究」と「自国文化の事象の単なる紹介(=所謂“cultural show”)」であって、具体的

な形で「国」という拘束枠からの自己解放を積極的な形で打ち出した発表や、「国」という文化の枠組みを客観的・相対的にとらえ返そうとした発表が殆どなかったことが、この授業実践の達成度の不十分さを明示している。これには後述するような問題点も関係しているが、初期の問題の立て方が明らかに不適切であった、あるいは狭かったことに起因している。 कारणとして1名の学生のみから以下のような評価が出されたことが、この授業の僅かな達成度を示すものとなった。

「日本という国の中には民族的・国的な意味での異文化はあまり存在していないように思われ、また今までそのようなことに触れる機会も少なかったが、今回の授業を通してそういった異文化の存在を身近に感じることができ、また異文化がそういったものだけでなく、身近なところにも多数内在されているものだということを知ることができたと思う。」

8.2 明らかになった問題点

本節では、問題点と言うよりは担当者の“誤算”を挙げておく。

第一点として、どちらかと言えば日本人学生(新渡戸カレッジ学生)に焦点を当てた授業の前提が日研生の一部にあっては既により越えられていたか、逆に日本人以上(以下?)の状態だった、ということがある。具体的に言えば、例えば日本に関するステレオタイプである「一国家・一民族・一言語」という発想が既に自明ではない国の受講生もいたし、逆にそれを重視する国の受講生もいたため、前提が一元化できず、ディスカッションが初期段階でもたつたケースがあった。

第二点として、(具体的国名は避けるが)国や政治体制の“公式的な”歴史や文化理解を持たされている(と推察される)学生の離脱が少なからずあったということがある。勿論、学生自身はそうした理由を明言したわけではないが、授業内で当該国における過去の政治闘争や事件を扱ったり、冒頭に示した『『自文化・異文化』に対する思いこみから脱却する』という目標を聞いたりしただけで受講を取りやめる学生が一部の国に集中して現れたことはまさに“想定外”であった。

そして第三の、最も大きな問題点かつ“誤算”は、一端的に言うなら「多文化交流が『多文化交流科目』を破壊する」というジレンマの発生であった。これには、前述した日本語のレベルも関係してはいるが、それ以

上に、「ディスカッションや対話を重んじる文化とそうでない、あるいはそれほどではない文化」との間に陰悪な関係が発生しがちになる(→具体的な不満として「こちらは一所懸命しゃべっているのに〇〇国人は全然しゃべらない」という現象として現れた。さらに、一国内に複数の民族が居住し複数言語圏が形成されている、多文化交流が当たり前の国・地域の人間と、そうでない、あるいはそう自覚されていない国／地域の人間との間で齟齬が生じるという現象も発生した。これらは、まさに「多文化」が存在するからこそ発生し得る事態ではあるが、同時に、「ディスカッション」という授業活動それ自体の破壊・停滞をもたらすものにもなり、一旦そうした事態が発生してしまうと、受講生だけの力でそこを切り抜けることはきわめて困難であることが分かった。(担当者は、あくまでも原則を堅持して授業内では介入せず、プロトコル・ノートで調停を試みたが上手く機能したとは言いがたい。)

第四に、－第二の問題とも深く関連するが－受講生の母国の歴史的・政治的状況が、授業の目標、特に『『自文化・異文化』に対する思いこみから脱却する』や、先に挙げた『『国』にとらわれた『文化』の見方を考えなおす場』という授業のあり方と真っ向からぶつかる場面があった、ということが挙げられる。これも国名は伏せるが、隣接する大国に政治的・軍事的・文化的に長きにわたって支配されてきて、近年ようやく独立を勝ち取った歴史を持つ国の受講生にとっては、むしろ大国支配の長い歴史の中で抑圧されてきた自国＝自民族の伝統文化をこれから復興・活性化させることが緊要な課題であり、むしろ「国」と「文化」の結びつきや「思いこみ／思い入れ」を未来に向けて強化していかなければならないという使命感が優先される。このような受講生は、授業が進む中でその方向性と自身の国家的・民族的課題との齟齬を自覚するようになり、授業に対して消極的となる、あるいは活動を拒否することがあった。このような、授業の方向とぶつかる国・地域のあり方を有する学生への対応は、当然ながら極めて難しいものであり、また、上記のような意識の持ち方の当然の帰結として、自国・自民族文化の紹介を口頭発表の内容とする(＝単なる“cultural show”)ことで終わってしまうことにも結びついていた。

以上が、達成できた点、及び問題点である。

9. 今後の課題

本章では、前章までで述べ来った事柄を踏まえて今後の課題を明らかにするべきであるが、率直に言えば、上述の諸問題にどのように対応し得るか、有効な手立てはまだ見いだせない状態である。「多文化交流」、「異文化間コミュニケーション」といった営為が、「相互理解」といった“綺麗事”で終わるわけではなく、そこにさまざまなコンフリクトが発生することは十分に予測できたことであるが、既述のように授業そのものを破壊するほどのコンフリクトが発生したことは、一繰り返すが－“想定外”であり、その原因が；

- 1) 授業の方針や目的
- 2) 受講生の帰属等の諸属性(日本語のレベルを含む)
- 3) ディスカッション中心という授業形態
- 4) 形成されたグループのメンバー構成
- 5) 口頭発表課題の設定の仕方
- 6) 担当者の介入の仕方や回数

といったこと(のいずれ)にあるのか、あるいは他の要因にあるのかを分析・検討し、これまでの実践を解体・再構築する必要があると考える。

同時に、今回の実践から浮かび上がった問題(あるいは疑念)として、「日研生の本音はどこにあるのか？」ということも指摘しておきたい。

既述のように、クラスの1/3が日本語のレベルの問題を感じていたことが判明したが、他方、日研究生は日本人とともに学びたいと希望していることが以前から報告されていた。しかし、上記の状況を考えるとその内実は慎重に検討されるべきである。日研究生が真に希望しているのは；

- a) 日研究生が隔離された環境への忌避と日本人との空間的同居への希望
- b) 日本人との単純な知識交換のレベルだけの期待
- c) 真剣なディスカッション
- d) 授業以外で関わり合う機会を持つ
- e) その他

のどのレベルなのかが日本語・日本文化研修コースの教育効果を高める上でさらに分析・考察されるべきであると筆者は考える。

甚だ不十分ではあるが、以上を筆者の多文化交流科目の実践報告とした。

註

- (1) 代表的なものとしては、「日本は、一国家、一民族、一言語の国である」、「日本人は勤勉である」、「日本人は集団主義である」等々。

参考文献

大橋良介（2007）『美のゆくえ』燈影社

桑木務（1981）『大戦下の欧州留學生活』中央公論新社

杉本良夫（1997）「日本文化という神話」井上俊他（1997）『岩波講座現代社会学23 日本文化の社会学』岩波書店 pp.7-38

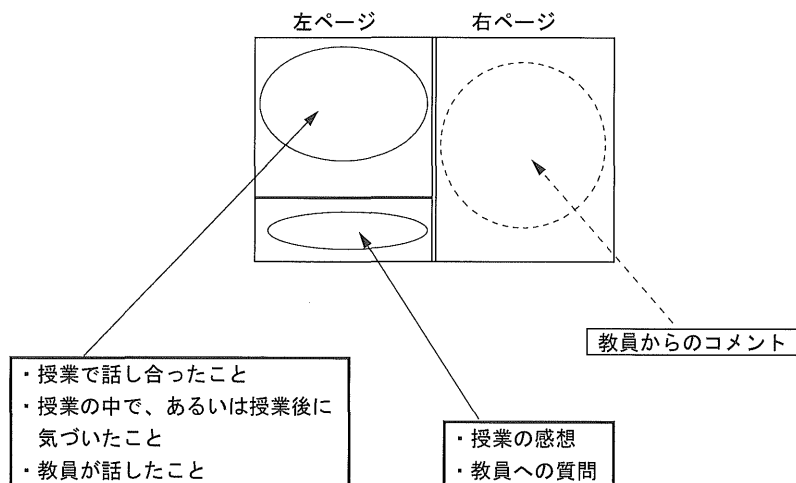
濱口恵俊（1997）「国際化のなかの日本文化」井上俊他（1997）『岩波講座現代社会学23 日本文化の社会学』岩波書店 pp.39-70

ハルミ・ベフ（1997）『増補新版 イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社

【資料】



プロトコル・ノートの書き方と使い方



<作り方と課題>

- 1) ノートの見開きの構成は上ようになります。
- 2) 毎週、授業終了後に、授業を振り返って の内容を書いてください。
- 3) 教員への質問は、なければ書かなくていいです。
- 4) 授業の次の週の月曜日の午後5時までにノートを教員に提出してください。
研究室にもってくるか、ドアの前の箱の中に入れてください。
- 5) ノートの表紙には必ず名前とグループ番号を書いておいてください。

<使い方>

- a) 授業の内容を振り返って、頭の中に定着させるために使います。
- b) 疑問点や問題点を整理するために役に立ちます。
- c) 次のディスカッションの進め方を考えるのに役に立ちます。
- d) 教員のコメントから、考えるヒントを得ることができます。
- e) 一学期のおわりにレポートの材料や発想の手がかりを得ることができます。
- f) この授業についての自分の進歩の状況が分かります。

なかむら しげほ (留学生センター准教授)